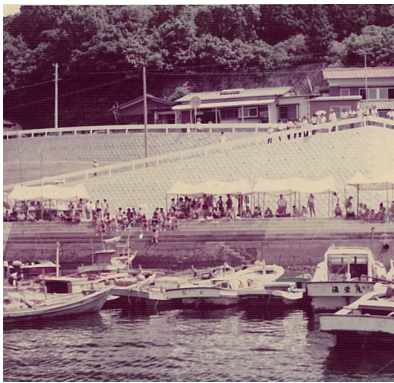




平成 27 年まではうたせ舟からスタートをしていました



昭和 54 年の競舟大会。多くの人でにぎわう大泊漁港



昭和 36 年頃の木製の競舟。当時は 1 艇に 20 人以上が乗っていました

受け継がれてきた伝統

今では津奈木の夏の風物詩とも言える競舟大会。そんな競舟はどのようにして始まり、どんな歴史を歩んできたのか。競舟のルーツと現在までの移り変わりについて迫ります。



競舟の起源

競舟の元祖は「ペーロン」と言われており、その起源は紀元前 300 年頃の中国の戦国時代までさかのぼります。文人政治家の屈原は、楚国の王である懷王を助け、善政を敷いていた人物。しかし懷王が裏切られ、敵国に捕らえられてしまいます。屈原は楚の国運をなげき、汨羅（湖南省を流れる川）に身を投じました。人々は屈原の死を悲しみ、龍舟を浮かべ、その霊をなぐさめました。

この追悼の儀式がやがて龍舟を漕ぎ、速さを競い合う行事として定着していったのが「ペーロン」の起源と言われています。

日本、そして津奈木への伝来

ペーロンが日本へ伝来したのは 1655 年で、「飛龍」や「白竜」などの中国語のなまりが語源となっています。

本町の競舟の歴史も古く、大泊地区の競舟は江戸時代末から行われていたそうです。木材などを帆船で福岡などへ運んだときに、帰りに立ち寄った長崎で見たペーロン競漕を持ち込んで、漁の帰りの網舟同士の競い合いや縄張り争

町行事としての競舟

江戸時代末から約 150 年間続いていた競舟大会は、若者の減少による漕ぎ手不足と舟の老朽化が原因で昭和 40 年に一時中断してしまします。大会中断を受け、青年たちをはじめ町民から競舟復活を叫ぶ声が大きく上がりました。そして、町が舟を造り、23 人乗りだったのを 15 人乗りにすることで、翌年の昭和 41 年には町の行事として復活を遂げました。これが第 1 回大会として開催され、一般の部に 11 チーム、中学生の部に 6 チーム、計 17 チームが出場しました。当時、ペーロン大会が開催されていたのは本町を入れて全国でも 2 つだけ。そのためメディアでも大きく取り上げられ、会場は多くの人でにぎわったそうです。

当初は、舳斗方面から大泊漁港までの 500 ㍎の直線コースでしたが、干拓堤防が整備されたことから、平成 6 年の第 29 回大会からは現在の場所で開催されるように。平成 29 年からは悪天候やコロナ禍により中止が続いていましたが、コロナが収束しつつあることや天候に恵まれ、7 年ぶりの開催となりました。

津奈木町競舟史

- 昭和 39 年以前
大泊地区と赤崎地区のお盆の地区行事として開催
- 昭和 40 年
漕ぎ手不足と舟の老朽化で中止
- 昭和 41 年
町行事として第 1 回競舟大会を大泊漁協前で開催。舟が町で造られ、23 人乗りから 15 人乗りへと変わる
- 昭和 56 年
500 ㍎コースで競漕
- B & G 財団津奈木海洋センター竣工記念競舟大会
- 昭和 63 年
干拓から見られるようにするためコースの軽微な変更
- 平成元年
合串漁港修築落成記念大会として、平国漁港で開催。このときは 400 ㍎のコースで競われた
- 平成 3 年
舟が木製から FRP（強化プラスチック）製となる
- 平成 4 年
舟が 15 人乗りから 13 人乗りへと変わる
- 平成 6 年
会場が大泊漁協前から干拓堤防へ
- 平成 9 年
コースが 500 ㍎から 400 ㍎へ変わる
- 平成 26 年
試合形式の変更
- 旧・各チーム 3 回出場し、各回の得点の合計で順位を決定
- 新・トーナメント戦で順位を決定
- 平成 28 年
400 ㍎コースから 300 ㍎コースへ
- うたせ舟からのスタートから漁船からのスタートに変わる

INTERVIEW

変わらない鐘の音が盆の到来と思い出を運んでくる――

私が競舟を始めたのは第二次世界大戦から帰還した後の 20 歳手前くらいからでした。当時から練習はとても厳しく、漕ぎ方の研究や息を合わせて漕ぐことを必死に練習。人一倍負けず嫌いで中途半端なことが嫌いだった私は、この厳しい練習が好きでした。練習でも本番でも息を合わせるため声高らかに掛け声を出し、力いっぱい舟を漕いだことを今でも覚えています。時には仲間とぶつかることもありましたが、一生懸命取り組んでいたからこ

そ、本番で勝ったときはとてもうれしかったです。負けた時は悔しくてかなり落ち込みました。勝てば来年も勝つぞと意気込み、負ければ次は必ず勝つと決心し、結果はどうであれ次の競舟へのモチベーションに繋がっていました。舟を漕がなくなった今でも競舟の鐘の音を聞くと当時のことを思い出し、懐かしさとともにことしもお盆の時期になったと感じます。町の伝統行事である競舟大会がこれからも受け継がれていくことを願っています。



新立 和市さん（大泊）